

構造方程式モデリングによる大学生の進路決定プロセスに関する分析

Analysis of Undergraduates' Vocational Decision-Making Process with Structure Equation Modeling

柴 山 直・蛭 谷 ひとみ

SHIBAYAMA Tadashi・EBITANI Hitomi

1. 問題と目的

将来の職業に関する展望が持てず、職業を自己決定しない、あるいは自己決定できない職業未決定の問題については、既に20年も前に笠原（1984）が指摘して以来、Erikson（1959）の心理的モラトリアムの観点から、いくつもの研究がなされてきた（下山，1986；松尾・佐野，1993；下山・木村，1994など）。たとえば，下山（1986）は職業未決定に関する尺度と自己の確立に関する尺度を作成し，両者の関連性を調査している。一方，Salomone（1982）やSlaney（1988）などによれば，下山が定義した職業未決定状態とは別に，主としてパーソナリティ的な要因から職業を決定「できず」にいる indecisive なものと，何らかの合理的な理由から決定「しない」でいる undecided なものとが想定できる。若松（2001）は，このうち undecided な未決定を念頭に置いた，大学生の進路未決定についてのプロセスモデルを提案している。

進路未決定をもたらす要因で，まず指摘できるのは，自己認識が不十分で自己確立が達成されていないという問題である。私たちは自己を見つめ，自分の性格や興味などを把握しながら，自分のやりたい職業・自分にあった職業を選択していくものである。現在の自分を見つめ，社会に自分自身をどのように生かしていきたいのかがわからなければ，これから

の自分の生き方は見えてこないであろう。また，自己をマイナスに考える傾向があると，将来の自分にも希望が持てなくなり，将来に対する不安が大きくなるのではないだろうか。つまり，自分に対して価値を見だし，自己を理解し，自己を受け容れていくことが進路決定には重要な条件となるのである。

次に，親からの心理的経済的な独立という側面も要因として指摘できる。自分のすすむべき道を決めることと，親から独立・自立することは，青年期において表裏一体となる大きな発達課題でもある。

さらには，Bandura（1977）の提唱した自己効力（self-efficacy）理論を進路選択場面に適用した富安（1997）が指摘するように，自己効力感が低く，その行動を実行できる確信がないと，容易に行動にふみだせず，結果として進路決定をひき延ばすことになるとも言える。このようにパーソナリティ特性に着目した研究としては，進路不決断と進路選択過程に対する自己効力感に強く関連があること示したTaylor & Betz（1983），自尊感情や不安傾向と進路選択に対する自己効力感との関連を示したRobbins（1985）などが存在する。

このように進路未決定にいたるプロセスには様々な要因が考えられる。そこで，本研究では，進路未決定に影響を与える要因として，自己確立（自己価値，自己理解，自己受容，親からの独立意識，決断力の因子から成り立つ状態を自己確立と定義する），進路選択に対する自己効力感を考え，それらの要因

2003. 9. 1 受理

* 新潟大学教育人間科学部教育科学講座

**新潟大学大学院教育学研究科修士課程

と進路未決定との関連性を調べ、構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling; SEM もしくは共分散構造分析) によってそのプロセスをモデル化することを目的とする。

2. 方 法

新潟大学の大学3年生336名 (男性170名, 女性166名) を対象に, 2002年11月上旬から中旬にかけて講義時間等を利用して一斉に配布しその場で回収した。所要時間は約20分であった。

質問紙は次のとおりであった。①自己確立を測定する尺度: 自己確立を成り立たせている要素を「自己価値」, 「自己受容・自己理解」, 「親からの独立意識」, 「決断力」の4つと仮定した。『自己価値』にあたるものには, 自尊感情 (山本・松井・山成, 1982), 自己肯定意識尺度 (平石, 1990b), 無力感尺度 (青柳ほか, 1985) を, 『自己受容・自己理解』にあたるものには, 自己受容尺度 (宮沢, 1980) を, 『親からの独立意識』には青年期の自我発達上の危機状況尺度 (長尾, 1989) と独立意識尺度 (加藤・高木, 1980) を, また, 『決断力』には, CDDQ-R (Gati et al, 1996) を参考にして, 計48項目からなる自己確立尺度として新たに構成し直した。この尺度は7月に行った予備調査にもとづき, その信頼性と妥当性, 項目内容について再検討したものである。

②進路選択に対する自己効力感を測定する尺度: 進路選択に対する自己効力尺度 (浦上, 1995) を使用する。この測定尺度は, 計30項目から構成される。③進路決定状態を測定する尺度: 「現在, あなたは将来の進路について考えていますか」と質問し,

「あまり考えていない」, 「全く考えていない」に回答した者は, 『未決定者』とする。「考えている」に回答した者に対しては, 決定・未決定の定義に従って設定した5つの進路状況の中から, 現在の自分の状態に一番近いと思われる番号に選択してもらい, さらに決定者・未決定者を分類する。「1 進路の方向が全く見えない」「2 いろいろ考えているが, 進路の方向はあまり定まっていない」に回答した者は『未決定者』, 「3 進路の方向はだいたい定まっているが, まだ迷いがある」に回答した者は『迷い』, 「4 進路の方向はだいたい定まっている」「5 将来自分が何をしたいか確信を持っており, 進路の方向ははっきり定まっている」に回答した者は『決定者』とする。

本研究では, 以上の3つの尺度のうち, 特に①と②を構成する計78項目より得られたデータを中心に分析をすすめることとする。

3. 結果と考察

3-1 未決定者と決定者

調査協力者のうち進路未決定者と決定者の割合は, 表1に示すとおりであった。未決定者は141名 (42%), 迷っている者は89名 (26.5%), 決定に至っている者は106名 (31.5%) となった。就職活動が年々早まっていることを考慮すると, 決定者が31.5%と少ないのは, 将来の進路についての意思決定が困難であることを物語っていると言える。

表1. 決定者と未決定者の内訳

	『未決定者』				『迷い』	『決定者』	
	進路について全く考えていない	進路についてあまり考えていない	進路の方向が全く見えない	いろいろ考えているが, 進路の方向はあまり定まっていない	進路の方向はだいたい定まっているが, まだ迷いがある	進路の方向はだいたい定まっている	進路の方向ははっきり定まっている
男	1	35	6	29	41	40	18
女	3	19	2	46	48	33	15
合計	4	54	8	75	89	73	33
	141名 (42%)				89名 (26.5%)	106名 (31.5%)	

3-2 自己確立尺度の検討

【因子分析】

自己確立の因子構造を検討するために、48項目の評定値に対して主因子法による因子分析を行ったところ、5因子で全体の37.6%を説明できることから、5因子を抽出し、バリマックス回転を行った。結果は表2に示すとおりである。この表では、各因子についての負荷量が0.30以上のものを選び、同じ因子への負荷量が高い項目から下位尺度を構成し、順序を入れ替えてある。

この抽出された5因子についての解釈を行う。第1因子は「私は魅力的な人間に成長しつつある」「将来、有能な人間になると思う」「私は価値のある人間である」といった14項目の因子負荷量が高く、これを『自己価値』の因子と命名した。この因子で構成される下位尺度の信頼性係数(α 係数)は0.89であった。

第2因子は「私は自分の長所や短所がわかる」「人に負けられないような得意なことや自慢できることがある」「自分の良いところも悪いところありのままに認めることができる」といった9項目の因子負荷量が高く、これを『自己肯定・自己承認』の因子と命名した。この因子で構成される下位尺度の α 係数は0.78であった。

第3因子は「何かしたあとで、それが正しかったのかどうか、心配になることが多い」「私は考えが変わりやすい」「私は意志が弱い」といった10項目の因子負荷量が高く、これを『不安傾向・決断力不足』の因子と命名した。この因子で構成される下位尺度の α 係数は0.78であった。

第4因子は「今の自分は本当の自分でないような気がする」「私は自分とは違うだれか別の人になりたい」「私は自分のことがわからない」といった6項目の因子負荷量が高く、これを『自己理解・自己受容の欠如』の因子と命名した。この因子で構成される下位尺度の α 係数は0.75であった。

第5因子は「困っている時や悲しい時は、親を頼りたくなる」「何かする時には、親にはげましてもらいたい」「自分で決心できない時は、親の意見に従うようにしている」といった6項目の因子負荷量が高く、これを『親に対する依存心』と命名した。この因子で構成される下位尺度の α 係数は0.74であった。

【自己確立の下位尺度間の相関】

因子分析により抽出した因子どうしの相関をみるため、相関分析を行った。その結果は表3に示すとおりである。まず『自己価値』について見てみると、『自己肯定・自己承認』との間には強い正の相関($r = .67, p < .01$)があった。『不安傾向・決断力不足』との間には負の相関($r = -.41, p < .01$)、『自己理解・自己受容の欠如』との間には強い負の相関($r = -.54, p < .01$)、『親に対する依存心』との間には弱い負の相関($r = -.31, p < .01$)があった。次に『自己肯定・自己承認』について見てみると、『不安傾向・決断力不足』との間には弱い負の相関($r = -.31, p < .01$)、『自己理解・自己受容の欠如』との間には負の相関($r = -.39, p < .01$)、『親に対する依存心』との間にはごく弱い負の相関($r = -.22, p < .01$)があった。さらに『不安傾向・決断力不足』について見てみると、『自己理解・自己受容の欠如』との間には強い正の相関($r = .52, p < .01$)、『親に対する依存心』との間には弱い正の相関($r = .32, p < .01$)があった。最後に『自己理解・自己受容の欠如』について見てみると、『親に対する依存心』との間には弱い正の相関($r = .34, p < .01$)があった。

表3を見てわかるように、自己確立尺度の下位尺度間の相関分析により、『自己価値』と強い正の相関があったのは『自己肯定・自己承認』($r = .67$)、強い負の相関があったのは『自己理解・自己受容の欠如』($r = -.54$)である。この結果から、自己を理解し、肯定的に捉え、自分のことを認めることができれば、現在の自分にも将来の自分にも価値を置くことができると言える。逆に、自分のことを十分に理解していなかったり、否定的に捉えていれば、当然自己を受け容れるどころか自分に価値を置くという方向には考えづらい。『不安傾向・決断力不足』($r = -.41$)との間、『親に対する依存心』($r = -.31$)との間に弱い負の相関しかなかったのは、実際に自分に価値を置くということに決断力や親に対する依存心が関わっていない、つまり『自己価値』と『不安傾向・決断力不足』、『自己価値』と『親に対する依存心』は別の次元であることが理由として考えられる。

次に『自己肯定・自己承認』についてであるが、『不安傾向・決断力不足』($r = -.31$)との間にも、『自己理解・自己受容の欠如』($r = -.39$)との間にも、『親に対する依存心』($r = -.22$)との間にも弱い負の相関しかなかった。この結果の原因とし

表2. 自己確立尺度の因子分析結果

項目	項目内容	I	II	III	IV	V
19	私は魅力的な人間に成長しつつある	.68				
10	将来、有能な人間になると思う	.64				
6	将来に希望と期待をいだいている	.56				
27	何でも自分で積極的にやっていく方である	.55				
30	生きることの意味や価値を自分で見出すことができる	.54				
36	自分の人生を自分で築いていく自信がある	.51				
* 4	私は自分に自信がない	.51				
38	私は自分なりの生き方を主体的に選んでいる	.51				
24	私は自分なりの個性を持っており、大切にしている	.51				
1	私は価値のある人間である	.50				
40	生活の中に自分の個性を生かそうと努めている	.47				
23	私は自分のことを信頼している	.46				
5	自分に対して肯定的である	.41				
21	社会の中で自分の果たすべき役割があると思う	.41				
42	私は自分の長所や短所がわかる		.65			
31	私は自分の性格を知っている		.55			
11	人に負けないような得意なことや自慢できることがある		.50			
8	ある点で人よりすぐれていると思う		.49			
33	自分自身の判断に責任を持って行動することができる		.45			
15	自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる		.41			
3	物事を人並みにはうまくやれる		.36			
* 2	不器用で何をやっても下手である		.36			
45	事実をわだかまりなく、さっぱりと受け入れる		.32			
*22	後悔するようなことをよくやる			.59		
*48	何かしたあとで、それが正しかったのかどうか、心配になることが多い			.53		
*34	私は考えが変わりやすい			.49		
*26	私の心はとても傷つきやすく、ちょっとしたことでもしょげやすい			.47		
* 7	私は意志が弱い			.46		
*14	私は何かにつけてよく心配をする			.45		
*39	自分一人で初めてのことをするのは不安である			.44		
*12	私にはあきっぽいところがある			.42		
18	いったん決断したことについてくよくよ考えたりしない			.39		
* 9	敗北者だと思ふことがよくある			.37		
*37	今の自分は本当の自分でないような気がする				.58	
*20	私は自分とは違うだれか別の人になりたい				.56	
*25	私は性格をまったく別の性格に変えたい				.51	
*35	私は自分のことがわからない				.44	
*28	本当に自分のやりたいことが何なのかわからない				.41	
*17	私は自分の得意なことが何かわからない				.37	
*29	困っている時や悲しい時は、親を頼りたくなる					.77
*46	何かする時には、親にはげましてもらいたい					.76
*13	自分で決心できない時は、親の意見に従うようにしている					.57
*41	小さなことでも自分で判断することができない					.41
*44	親にもっと理解され、愛してもらいたい					.40
*43	私はどうしたらよいかわからなくなると、自分の殻に閉じ込めてしまう					.37

(注) 表中の数値は因子負荷量, また*は逆転項目

表3 自己確立の下位尺度間の相関係数

下位尺度	自己肯定・自己承認	不安傾向・ 決断力不足	自己理解・ 自己受容の欠如	親に対する依存心
自己価値	0.67**	-0.41**	-0.54**	-0.31**
自己肯定・ 自己承認		-0.31**	-0.39**	-0.22**
不安傾向・ 決断力不足			0.52**	0.32**
自己理解・ 自己受容の欠如				0.34**

** $p < .01$

て考えられるのは、先に述べたように、自己を肯定し承認することと、決断力に欠けること・親に対して精神的に甘えていることとは別の次元であると考えられる。また、自己を理解していたからといって必ずしも自分を認めている、自己を肯定的に捉えているとは言い切れない部分があるということではないだろうか。

次に『不安傾向・決断力不足』であるが、『自己理解・自己受容の欠如』との間には強い正の相関 ($r = .52$) があつたが、『親に対する依存心』との間には弱い正の相関 ($r = .32$) しかなかった。自分のことを理解したり、受け容れる際にも決断力や心に内在している不安の大きさなどが影響しているのであろうか。

最後に『自己理解・自己受容の欠如』についてであるが、『親に対する依存心』との間には弱い正の相関 ($r = .34$) しかなかった。このような結果になったのは、それら2つの因子が別の次元のものであることが考えられる。

3-3 各要因間の関連

自己確立尺度の各5因子と進路選択に対する自己効力感、進路状況と進路選択に対する自己効力感のそれぞれの間にどのような関係があるかを調べるために、相関分析を行った。

まず、自己確立尺度の各5因子と進路選択に対する自己効力感との相関を見てみる。『自己価値』との間には強い正の相関 ($r = .67$, $p < .01$) が、『自己肯定・自己承認』との間には強い正の相関 ($r = .59$, $p < .01$) があつた。『不安傾向・決断力不足』との間には負の相関 ($r = -.39$, $p < .01$)、『自己理解・自己受容の欠如』との間には負の相関 ($r =$

$-.46$, $p < .01$)、『親に対する依存心』との間にはごく弱い負の相関 ($r = -.21$, $p < .01$) があつた。この結果を表4 a に示した。『進路選択に対する自己効力感』と『進路決断』の間にはやや強い正の相関 ($r = .50$, $p < .01$) があつた。この結果は表4 b に示すとおりである。

次に、自己確立尺度の各5因子と進路決定との相関を見てみる。『自己価値』との間には正の相関 ($r = .37$, $p < .01$)、『自己肯定・自己承認』との間にはごく弱い正の相関 ($r = .25$, $p < .01$) があつた。『不安傾向・決断力不足』との間には弱い負の相関 ($r = -.29$, $p < .01$)、『自己理解・自己受容の欠如』との間には負の相関 ($r = -.45$, $p < .01$)、『親に対する依存心』との間にはごく弱い負の相関 ($r = -.14$, $p < .01$) があつた (表4 c)。

相関分析において、『自己価値』と『進路選択に対する自己効力感』($r = .67$)、『自己肯定・自己承認』と『進路選択に対する自己効力感』($r = .59$) に強い正の相関、『自己理解・自己受容の欠如』と『進路選択に対する自己効力感』に負の相関 ($r = -.46$) があつた。さらに、『進路選択に対する自己効力感』と『進路決定』にやや強い正の相関 ($r = .50$) があつた。この結果から、進路選択に際して自己を理解し、自分に価値を見出すこと、自分に自信を持つことが大切であると言えよう。自分自身に自信を持つことが自分の進路を選択していく過程における自信へつながっていくことも証明されたと言える。しかし、『不安傾向・決断力不足』と『進路選択に対する自己効力感』($r = -.39$)、『親に対する依存心』と『進路選択に対する自己効力感』($r = -.21$) にはあまり強い相関がなかった。強い相関がなかったということは、まず個人差が大きかったためと考

えられる。また、不安や決断力や親に対する依存心によって進路選択がそれほど左右されるわけではなく、進路を選択していく過程においては、自分の興味や内面に強く関心がいており、それらがより直接的に影響しているためとも考えられる。進路の決定・未決定に関わらず、親から独立・自立しようとする意識は誰もが持っているものであり、青春期的という時期に直面して親に対する依存心や甘えが大きいとは考えにくい。さらに、学校を卒業して初めて社会に出て行くということは、人生の中ではかなり大きな節目となるため、進路選択に悩まないことの方がかえって少ない。このことが、決断力と進路選択に対する自己効力感に弱い相関しかなかった理由として挙げられるのではないだろうか。

自己確立尺度の『自己理解・自己受容の欠如』以外の因子は、いずれも進路決定にはあまり相関がなかった。しかし、3つのグループ（決定・迷い・未決定）においてプラスの内容の因子（『自己価値』、『自己肯定・自己承認』）は決定者ほど高く、マイナスの内容の因子（『不安傾向・決断力不足』、『自己理解・自己受容の欠如』、『親に対する依存心』）は決定者ほど低い結果となった。これは、進路決定者（未決定者）に内在している特性が浮き彫りになっただけであって、自己価値や自己肯定が高いからといって、あるいは不安傾向、親に対する依存心などが低いからといって、必ずしも進路が決定できるわけではないことを示している。上記に述べたように、自分に対する自信や理解が進路を選択していく上での自信となって、結果的に進路決定に結びついていると考えられる。つまり、進路が決定している者ほど、自己を理解し、自己肯定意識があり、自分に価値を見出すことができている可能性が高いと言える。逆に言えば、進路を決断できていない原因として、自己を理解していないことや自分を否定的に捉えている、普段から不安傾向が強い、決断力が足りない、親に対して精神的に依存している部分があるとも言えるだろう。

表4 a 自己確立尺度の各因子と進路選択に対する自己効力感との相関係数

	r
自己価値	0.67**
自己肯定・自己承認	0.59**
不安傾向・決断力不足	-0.39**
自己理解・自己受容の欠如	-0.46**
親に対する依存心	-0.21**

** p < .01

表4 b 進路決定と進路選択に対する自己効力感との相関係数

	r
進路決定	0.50**

** p < .01

表4 c 自己確立尺度の各因子と進路決定との相関係数

	r
自己価値	0.37**
自己肯定・自己承認	0.25**
不安傾向・決断力不足	-0.29**
自己理解・自己受容の欠如	-0.45**
親に対する依存心	-0.14**

** p < .01

3-4 構造方程式モデリングによる分析

以上の議論を踏まえ、進路未決定の背後にある心理プロセスを、構造方程式モデリングによりパス図で示したのが図1、図2である。先にも述べたように進路未決定と自己確立とは表裏の一体の関係にある。これらの図は、構成概念としてその自己確立を仮に設けた場合、自己価値や自己承認、あるいは職業選択や対処、見通しといった潜在変数にいかなる強さで影響を及ぼすかを標準化パス係数で見積もれるものである。モデル1と2のちがいは、モデル1が職業選択などの潜在変数に直接パスを持つと仮定している一方で、モデル2では「進路選択に対する自己効力感」という新たな潜在変数を経由して職業選択などにパスを持つように仮定している点にある。モデルの適合度を示す指標 GFI で見ると、モデル1が0.831、モデル2が0.826であった。また情報量基準 AIC で見ると、それぞれ、1549.144と1576.040となり、モデル1の方が良いモデルと判断できる。おそらく、概念的には、進路選択の際には、「自己確立」と「進路選択に関する自己効力」は極めて密接な関係にあるため、わざわざ、新たに潜在変数を設ける必要はないのであろう。実際、モデル2で両者の標準化パス係数が0.89と極めて高い値になっていることからそれが伺える。また、これ以外にも同様の視点からいくつかのモデルを仮定したが、結局、モデル適合度の観点から、モデル1以上のものは構成できなかった。

ただし、パスの方向が自己確立からその他の潜在変数へと向いているが、それが、この種のデータの

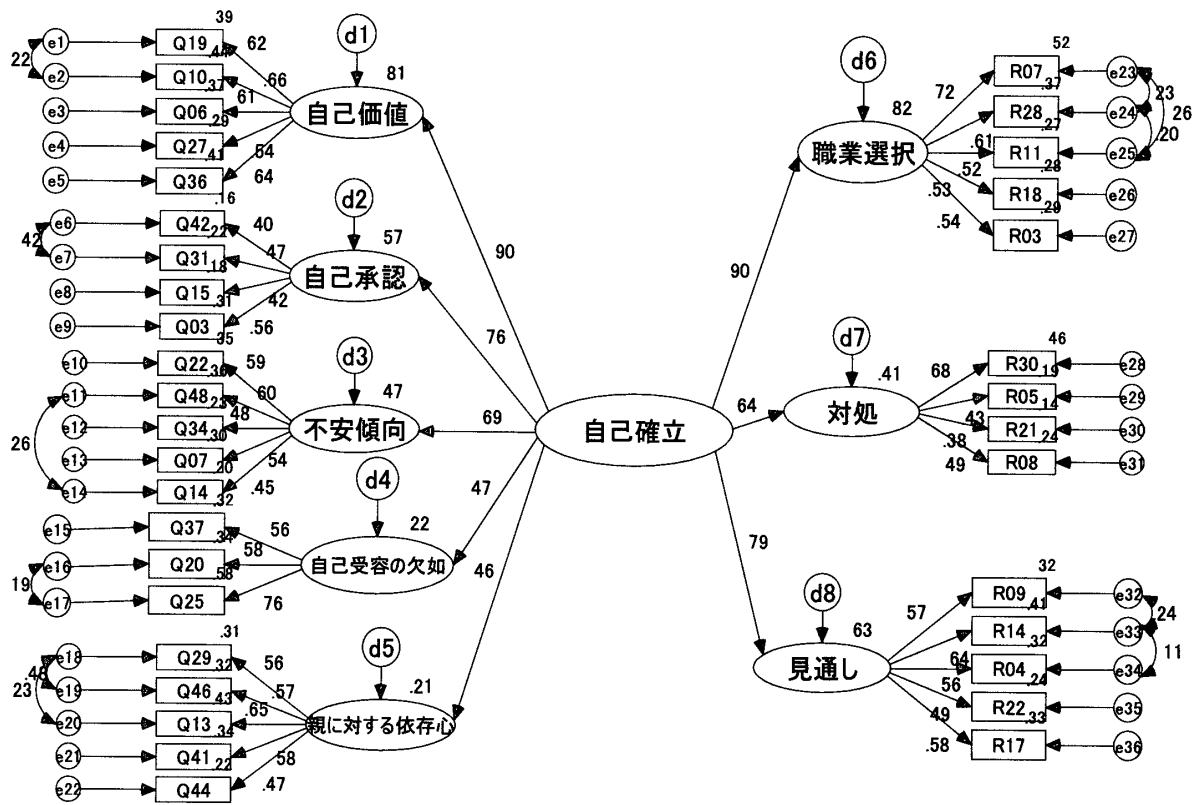


図1 モデル1のパス図

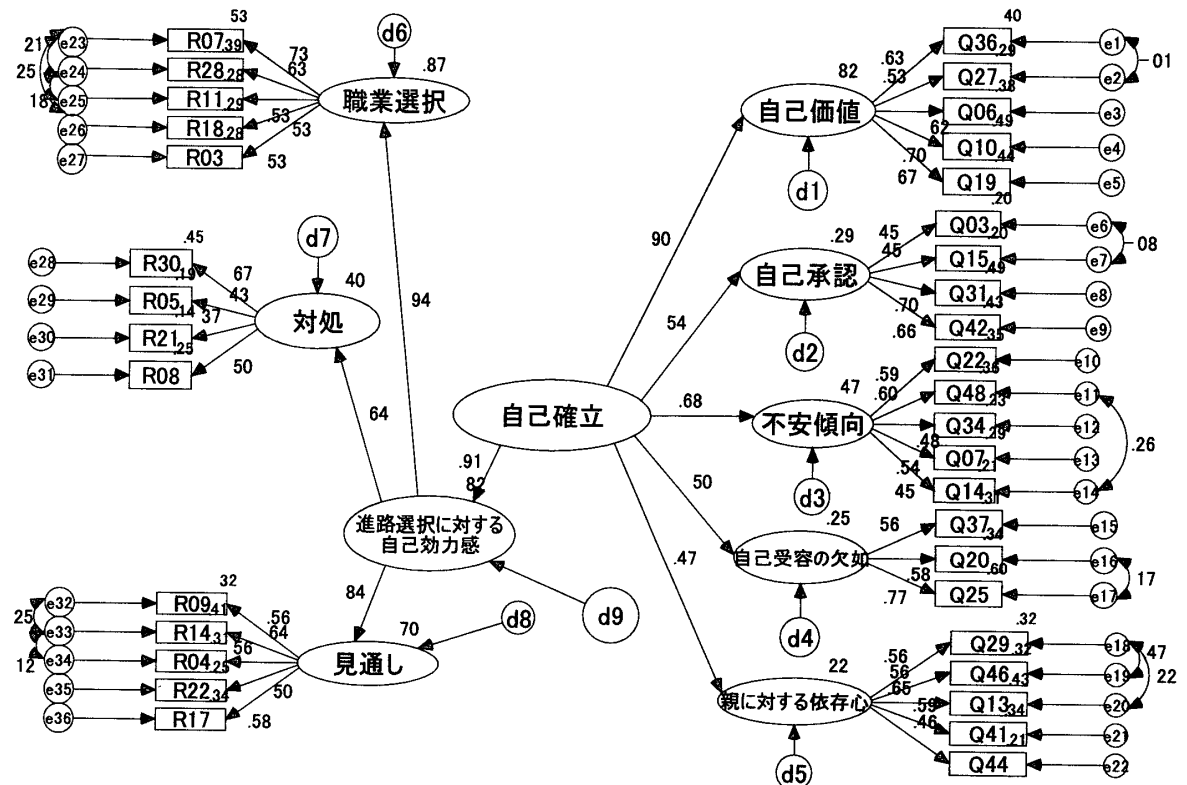


図2. モデル2のパス図

本質的な情報として、因果関係を示すものではないことに注意する必要がある。この方向は逆に向けても構わない。いいかえれば自己確立が自己価値や職業選択に影響を与えても、逆に、進路選択でいろいろ考え、悩みながら、自己価値を見だし、職業を決めていくそのプロセス自体が、自己を確立していくにあたって大きな影響を持つのだとも表現できる。おそらく青年期の発達課題という点からは後者の記述の方が現実をよりよく表現しているであろう。

4. 今後の問題

本研究では進路決定に影響を与える要因として、自己価値、自己理解、自己受容、親からの独立意識、決断力、進路選択に対する自己効力感を考えて進めてきた。因子分析より、『自己価値』、『自己肯定・自己承認』、『不安傾向・決断力不足』、『自己理解・自己受容の欠如』、『親に対する依存心』の5因子が抽出され、どの要因も進路選択に対する自己効力感に関連性があることがわかった。そして自己を理解し、自分を肯定的に捉え、自己に価値を見出すことが進路選択過程における自信につながっていることが明らかとなった。

また、3つのグループ（決定・迷い・未決定）における各要因の平均を比較したところ、プラスの要因（自己価値、自己肯定・自己承認、進路選択に対する自己効力感）では未決定者ほど平均が低く、マイナスの要因（不安傾向・決断力不足、自己理解・自己受容の欠如、親に対する依存心）では未決定者ほど平均が高い結果になった。

進路未決定者が持つ特性をまとめると、①自尊感情が低く、自己を肯定的に捉えられていない、②不安傾向が高く、決断力に欠けている、③親に対して精神的に自立していない部分があるという3点が挙げられる。さらに、現在では年々就職活動の時期が早まっていると言われているのに対して、本研究では全被験者の約4割が未決定者に該当する結果となった。これは、大学生の進路決断の困難さを物語っていると言える。

以上のことをSEMを利用してパス図で表現した。このことによって進路未決定の背後にある心理プロセスを図示することができた。この結果を踏まえて、未決定者が現実的に何について悩み、何に不安を持っているのかということや進路選択に対してどんな考えを持っているかなど具体的なところまで

考察を深める必要があろう。また、時間軸にそってどのように進路を決定していくのか、進路決定までの過程や心理的な変化も因果プロセスを記述する上で重要な観点である。

文 献

- 安達智子 1999 未入職者における就業動機—進路選択に対する自己効力感・職業未決定との関連について— 日本心理学会第63回大会発表論文集, 134.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 藤井義久 (1999) 女子学生における就職不安に関する研究 心理学研究, 第70巻, 第5号, 417-420.
- 廣瀬英子 (1998) 進路選択に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, 46, 343-355.
- Robbins, 1985 Validity estimates for the career decision-making self-efficacy scale. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, 18, 64-71.
- Salomone, P. R. 1982 Difficult cases in career counseling: Part II-The indecisive client. *Personnel and Guidance Journal*, 60, 496-550.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- Slaney, P. B. 1988 The assessment of career decision making. In Walsh, W. B. & H. Osipow (Eds.) *Career decision making*. Lawrence Erlbaum Associates.
- 田中奈緒子 2000 大学生の進路決定理由と職業に関する意識—性差を中心に— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 432.
- Taylor, K. M., & Betz, N. E. 1983 Application of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81.
- Taylor, K. M., & Popma, J. 1990 An examination of the relationships among career decision-making self-efficacy, career salience, locus of control, and vocational indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 37, 17-31.
- 富安浩樹 1997 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究, 第45

巻, 第 3 号, 329-336.

富安浩樹 1997 大学生における進路決定自己効力
と進路決定行動との関連 発達心理学研究, 第
8 巻, 第 1 号, 15-25.

浦上昌則 1996 就職活動を通しての自己成長—女

子短大生の場合—教育心理学研究, 第44巻, 第
3 号, 400-409.

若松養亮 2001 大学生の進路未決定者が抱える困
難さについて—教員養成学部 of 学生を対象に—
教育心理学研究, 49, 209-218.